

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	福山佑子
論文題目	帝政前期ローマにおけるダムナティオ・メモリアエ — 改変されたローマ皇帝の記憶と記録 —
審査要旨	<p>ローマ帝国では、元老院によって「悪帝」と判断された皇帝は、その死後、ダムナティオ・メモリアエ(記憶・記録の抹消)と呼ばれる処分を受けたとされている。しかし、ダムナティオ・メモリアエの実態については、元老院の関与の程度を含めて、不明な点が多い。本論文は、このようなダムナティオ・メモリアエの実態の解明を目指したものである。論文は、序論と本論5章、そして結論から構成されている。</p> <p>序論で、著者は、まずダムナティオ・メモリアエの研究史を詳細に辿り、その問題点を指摘する。著者が指摘する問題点は二つある。一つは、文献史料の利用が十分に行われていないこと。第二に、通時的な視点が欠けていることである。これら研究史上の問題点を踏まえながら、続く章の議論が展開される。</p> <p>第1章「カリグラの記憶とクラウディウス」では、ローマ皇帝として最初にメモリアの攻撃を受けたカリグラ(在位37～41年)の事例が検討される。文献史料によれば、カリグラの死後、元老院はそのメモリアを攻撃する方向で動いたが、カリグラを継いだクラウディウスは、当初、カリグラのメモリアを守ろうとした。これは即位時に権力基盤の弱かったクラウディウスが、カリグラに好意を抱いていた軍や民衆の支持を得ようとしたためであった。しかし、クラウディウスは、自らの権力基盤が固まると、カリグラのメモリアを攻撃するようになった。このようなクラウディウスの意向をくむ形で、各地でカリグラの彫像や碑文は姿を消した。著者は、このようなカリグラの事例の分析から、ダムナティオ・メモリアエが、元老院の決議や命令がなくとも、皇帝の意向で実施され得るものであったとの結論を導いている。</p> <p>第2章「『国家の敵』ネロとメモリアへの攻撃」では、暴君として名高いネロ(在位54～68年)の事例が検討される。ネロは、元老院によって「国家の敵」と宣言されたことが知られているが、この宣言はメモリアへの攻撃を含んでいたわけではなかった。しかし、ネロの彫像や碑文の破壊が、カリグラよりも大規模に行われたことは事実であり、「国家の敵」宣言がこの状況を後押しした可能性が示される。しかし、より重要なことはメモリアの破壊に地域差が見られることである。ネロのメモリアへの攻撃は、主に東方で行われていた。東方はネロ死後の内乱を鎮めて皇帝となったウェスパシアヌスが権力基盤とした地域であったのであり、ここからネロのメモリアを積極的に攻撃していたのは、ウェスパシアヌスであったとの結論が出されている。</p> <p>第3章「ドミティアヌスと『悪帝』のメモリア」では、第二のネロと呼ばれたドミティアヌス(在位81～96年)の事例が考察の対象となる。ドミティアヌスは、そのメモリアの破壊がはっきりと元老院によって決議されたことが分かる最初の皇帝である。しかし、ドミティアヌスのメモリアへの攻撃の実情を分析してみると、やはりそれほど組織だったものではなく、また激しいものでもなかったことが分かる。にもかかわらず、文献史料には、ドミティアヌスのメモリアが徹底的に破壊されたかのように書かれる。その背景には、「善帝」と「悪帝」が明確に区分され、「悪帝」にはそれにふさわしい処分がなされるべきであるという考えがローマ社会に定着していたためであろうと分析される。</p> <p>第4章「コンモドゥスと皇帝のメモリアへの攻撃の変容」では、ドミティアヌスの後、100年ほど後に久方ぶりに行われたダムナティオ・メモリアエの実態が分析される。文献史料には、元老院が主導してコンモドゥス(在位180～192年)を悪帝と断罪し、またメモリアの破壊を決議した模様が描かれ、実際に以前の事例よりも激しいメモリアの破壊が行われたことが碑文や彫像から明らかになる。それは「公的かつ組織的な処分」であった。著者は、このようなコンモドゥスの事例に見られるダムナティオ・メモリアエの変化の背景に、神格化の大規模化を含むアントニヌス朝期におけるメモリア称揚の興隆があり、人々のメモリアへの意識が高まっていたという事情があ</p>

氏名 福山佑子

ったことを指摘している。

第5章「セウェルス朝期の皇帝のメモリアの破壊とその背景」では、3世紀のゲタからアレクサンデル・セウェルスまでの皇帝の事例が考察されている。ゲタの場合は、元老院の決議がなされた形跡はなく、専ら兄のカラカラ帝の主導でメモリアの破壊が行われた。その破壊の程度は前例がないほど徹底的であり、また組織的に行われたことが指摘されている。ゲタ以後の皇帝については、元老院がメモリアへの攻撃に関与したかどうか不明瞭になる。著者はここにダムナティオ・メモリアエにおける元老院の主導性が薄れていったことを読み取っている。一方、同時代の代表的な歴史家であり、元老院議員でもあったカッシウス・ディオの記録を見ると、「悪帝」のメモリアを攻撃する意義が低下し、処分によって得られる経済的な利益が強調されるようになることが見てとれると述べ、社会におけるメモリアへの関心が変化していたことを指摘する。

「結論」では、ダムナティオ・メモリアエは1世紀に姿を現し、2世紀に社会的な価値を高めたが、3世紀には文献史料から姿を消したとされ、3世紀におけるダムナティオ・メモリアエの「変容」原因を、元老院の政治力の減退ではなく、メモリア価値が社会において低下したことに求めている。

本論文は、ダムナティオ・メモリアエと呼ばれる、皇帝のメモリアの破壊の実態を、膨大な資料を整理しながらよく復元し、元老院による皇帝の対抗手段とする通説的な見方への修正を迫っている点は高く評価できる。またダムナティオ・メモリアエの通時的な変化の相を捉えることに成功している点も、その成果として強調しておかねばならない。とはいえ、疑問点がないわけではない。例えば、本論文では、ダムナティオ・メモリアエが元老院の皇帝への対抗手段ではなかったという点を強調するために、元老院の役割を過小評価しているように見受けられる。また3世紀にダムナティオ・メモリアエが「変容」したとされるが、その実態が明らかではなく、したがって「変容」の原因をローマ社会におけるメモリアの重要性の変化に結び付ける説明にもやや疑問が残るように思われる。しかし、これらの疑問点は、本論文の価値を減じるものではない。本論文のように帝政前期のダムナティオ・メモリアエの全容に通時的に迫った研究は、欧米を見渡して存在せず、博士学位の授与にふさわしい論文であると判断される。

公開審査会開催日	2017年1月31日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	井上 文則	古代ローマ史	博士(文学)京都大学
審査委員	早稲田大学文学学術院 教授	前田 徹	古代オリエント史	
審査委員	学習院大学文学部 教授	島田 誠	古代ローマ史	
審査委員				
審査委員				